

青少年育成の問題と指導者の意識

原 岡 一 馬

問 題

現在、社会には、いじめ、登校拒否、自殺、非行など青少年を取り巻く諸問題が山積している。これらの問題について、大人たちはどう把握し、判断し、取り組もうとしているであろうか。これらの問題についてはいろいろ論議されてはいるが、これにどう対処していくか具体的に効果的な方策が見出せないのもまた事実である。

具体的方策を見出すには、日ごろ、大人たちが青少年をどのように見、どのような問題があると感じているかについて枠組みにとらわれず自由に意見を集めることから始める必要がある。次に、それらの結果から問題領域を構造化し、それに基づいて枠組みを構成し、実態を明らかにするための調査を行うことが望ましい。そして、その結果から問題点を明確にすることができ、具体的対策が生まれてくると思われる。

本研究は、青少年育成のための実態と指導方針を明確にするために、2つの段階の研究からなるものである。

第1研究では青少年育成のための指導方針を明確にするための第1段階として、実際に青少年指導に当たっている指導者に青少年がもっている問題点を自由記述してもらい、その中から具体的内容を抽出し、それを構造化して問題点を明らかにしようとするものである。つまり、青少年教育の問題がどのような内容と構造をもったものかを図式的に把握することが目的である。

第2研究では、第1研究で構造化された問題点を具体的に把握するための質問紙調査項目を作成し、これを青少年指導者に実施して得られた結果を因子分析し、青少年指導の構造の枠組みをつくり、次元を明らかにして、領域毎に標準を示して、地域や指導者がもつ問題領域や問題点を明確にし、青少年指導の手掛かりを得ようとするものである。

第1研究

日頃、青少年に接触し指導に当たっている多くの指導者が、現実の青少年をどのように見、理解し、問題を感じ

ているかをできるだけ自由にありのまま記述してもらい、それを構造化し、枠組みをつくることを目的とした。したがって、重要なことは反応の頻度ではなく多様さであり、少数意見も見落とさないことであった。

方 法

被調査者

佐賀県全域にわたる10地区で実施された青少年育成指導者地区別研修会に出席した青少年指導者、632名（男子448名、女子184名）で、実際に活動している領域は、子どもクラブ育成指導員、スポーツ少年団指導員、母子相談員、婦人補導員、少年補導員、ヤングテレホン相談員、母親学級講師、児童クラブ指導員、PTA役員、青少年センター指導員、ボーイスカウト指導者、ガールスカウト指導者、青少年野外活動指導員、青年団地区団長、青少年ホーム活動リーダー、青少年推進指導委員、青少年町民会議委員、など多様であり、多くの人が重複した役割をもっていた。年齢は、最高65歳、最低25歳で、平均年齢は46.2歳であり、幅広い年齢層の指導者からなっていたため、多様な意見がえられるものと期待された。

調査期間：昭和60年7月から昭和61年2月まで。

調査手続と集約

調査は、自由記述方式による質問紙法で、「最近の青少年について問題だと思われる点や教育上必要だと思われる点を具体的に箇条書にしてください。」であり、それに、①問題点、②教育上必要だと思われる点、③お聞きになった青少年の要望や生の声、など含めて下さいと付加した。

データ整理の手続きは、これら自由記述された内容を1つ1つ具体的意味内容の単位に分割し、それを抽出して1つの内容を一枚のカードに記録し、これをKJ法の手続き（川喜多二郎，1967；1970）によって構造化することであった。構造化に当たっては、5名からなる小集団討議を通して行われた。この5名は、それぞれ違った立場から青少年指導に関わりをもつものであり、

社会心理学研究者、青少年指導の行政担当者、青少年育成アドバイザー、スポーツ少年団指導員、子どもクラブ育成指導員など、研究者、行政担当者、実践指導者からなっていた。

抽出された具体的意見の数は350個となったが、これを要約して159枚のカードを作り上げた。これをKJ法の手順にしたがって、データ収集→ラベルづくり→ラベル集め→表札づくり（グループ化）を繰り返し、小グループ→中グループ→大グループ→大大グループ→大大大グループへと構造化を高めていった。

結果と考察

得られた結果は、図1の「青少年育成の問題構造」に示す通りであるが、最終的に3つのグループにまとまった。すなわち、

- I. 「大人の生き方や指導の姿勢の反省」であり、大人は生活態度を振り返り、統制による非行対策ではなく、自主的社会的活動を通して、子どもに成就感を味合わせ、人間性を育てること。
- II. 「子どもとの接触と相互理解を通しての指導への自信」であり、大人は子どもの活動や日常生活をよく見つけ、子どもとの接触を通して、お互いに子育ての基本を学び自信をもつこと。

III. 「指導者の自己研鑽と指導者間の相互調整」であり、社会活動の指導者は、関係団体、役員、親などとスケジュールの調整などを話し合い、特技、経験などを生かし、熱意をもって根気よく指導することであった。

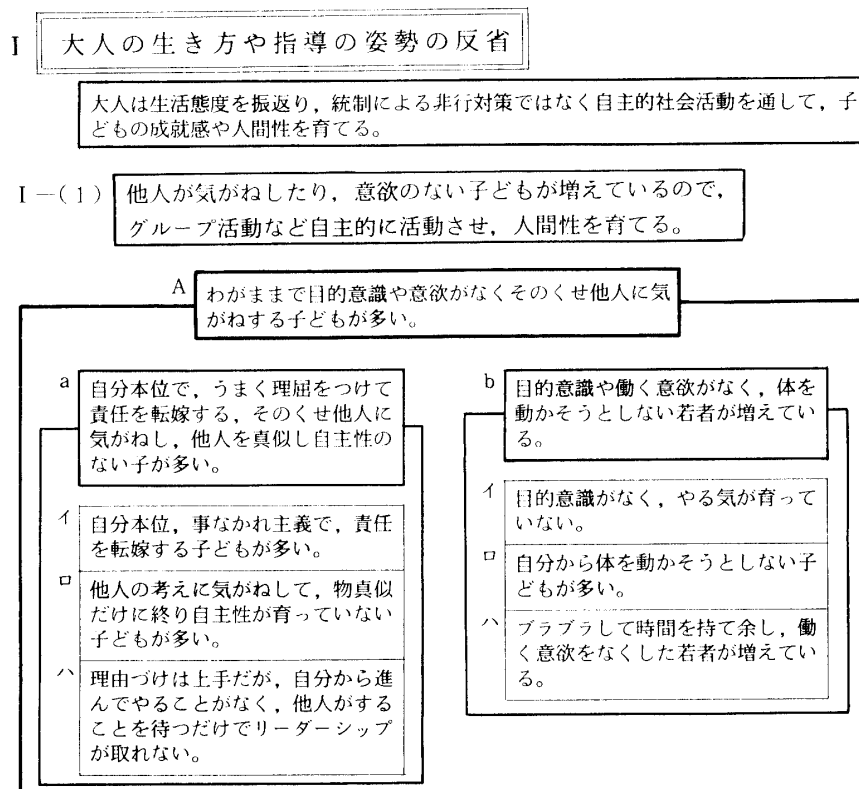
図1からわかるように、青少年育成の問題は、子ども自身の問題ももちろんだが、それより、大人の生き方、指導の在り方、指導者の問題がその大部分であったことは、親、教師、地域社会の指導者に対する大きな警告であったように思われる。

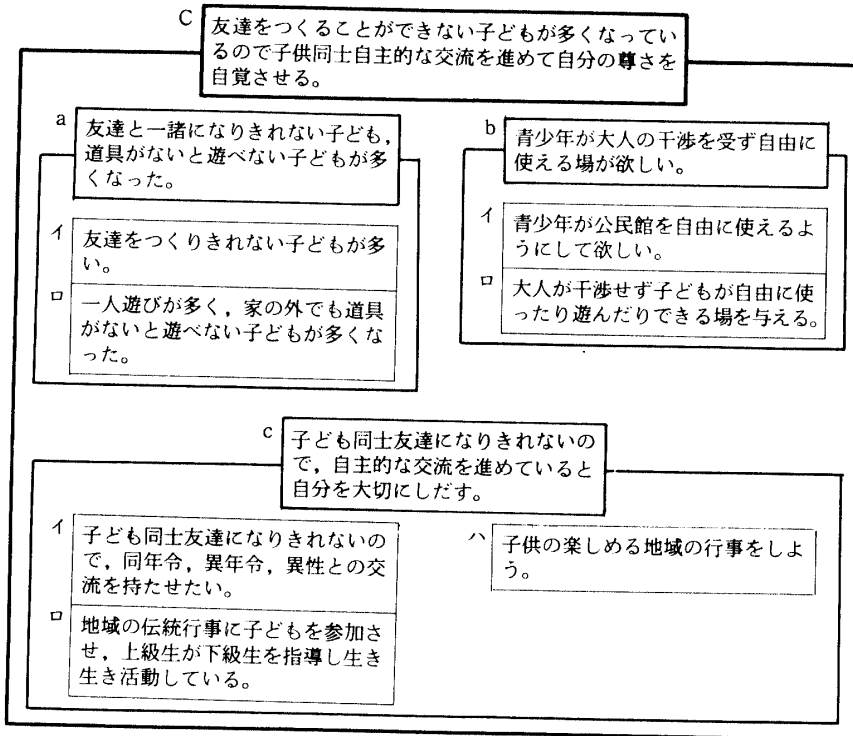
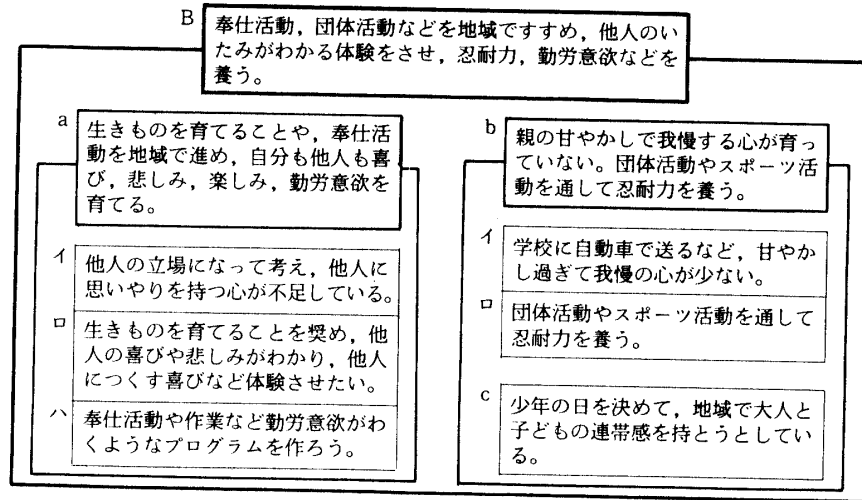
第2研究

第1研究から、青少年育成の問題がどのような内容と構造をもったものか図式的に把握することはできたが、どのような領域にどの程度問題があるか、また、指導者の性別、年齢別、地区別、経験年数別などによって、どのような違いがありどこに問題があるかがわからない。これを明らかにするには、図1に示された内容をもとに質問項目をつくり、その妥当性と信頼性を明確にして調査をする必要がある。

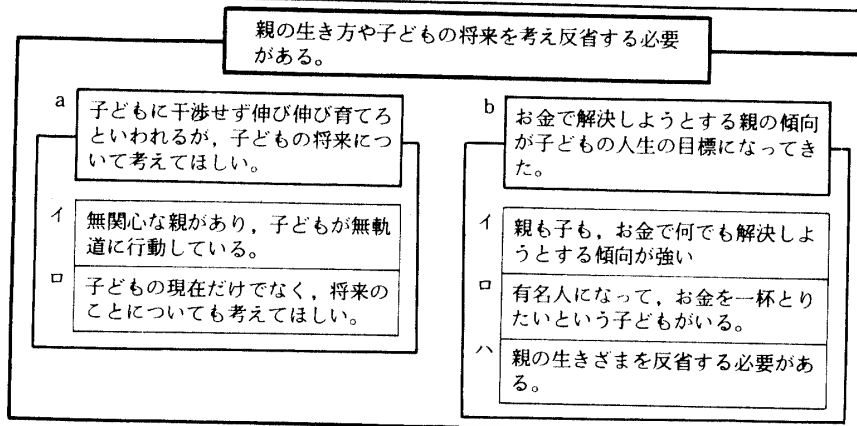
そこで、第2研究では、これらの内容を再検討し、質問紙形式に作り直し、質問紙調査フォームを作成して調査を行い、その結果を因子分析を用いて青少年育成の領

図1 青少年育成の問題構造



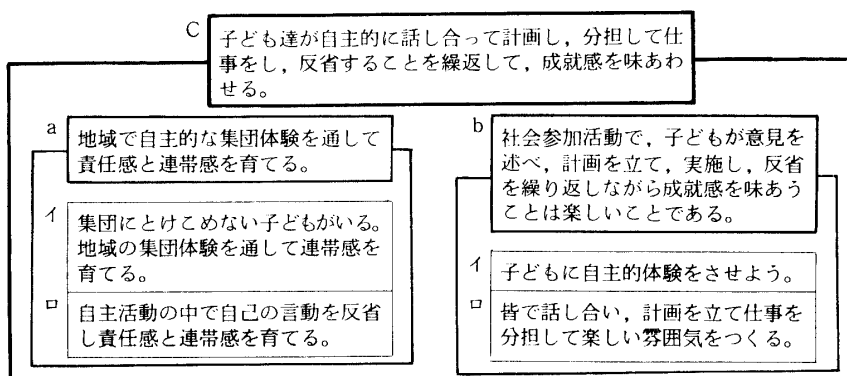
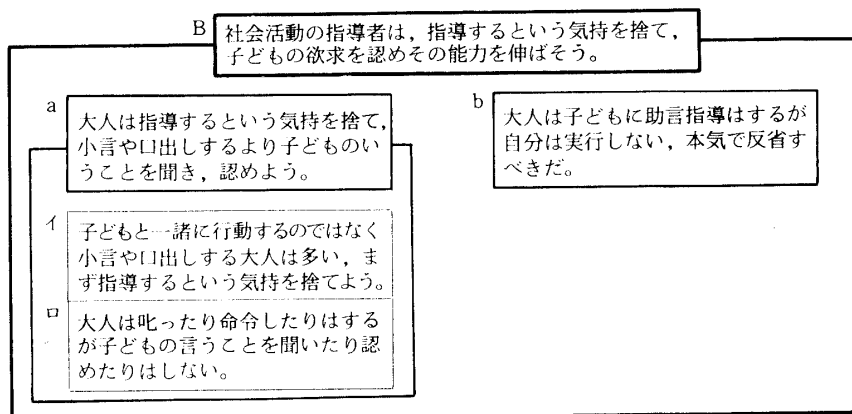
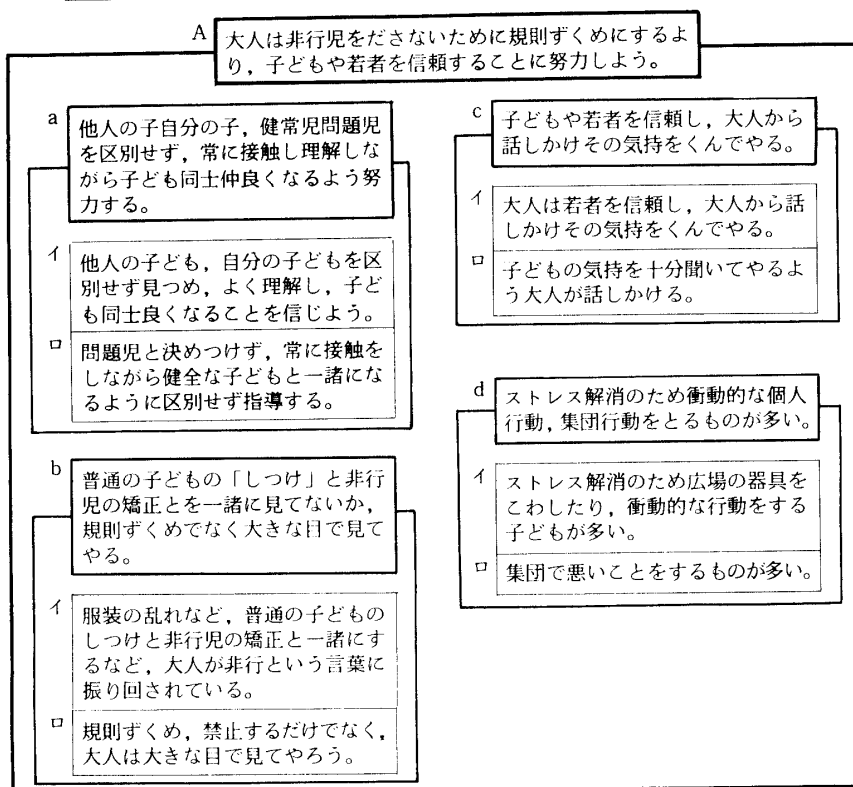


I-(2) お金で解決しようとする大人の影響が子どもの人生の目標に出てきた、大人は生きざまを反省し子どもの未来社会を把握して欲しい。



青少年育成の問題と指導者の意識

I-(3) 大人は非行対策として子どもを統制することだけを考えるのではなく、社会活動をすすめ、子ども達の自主的な活動を通して成就感を持たせる。

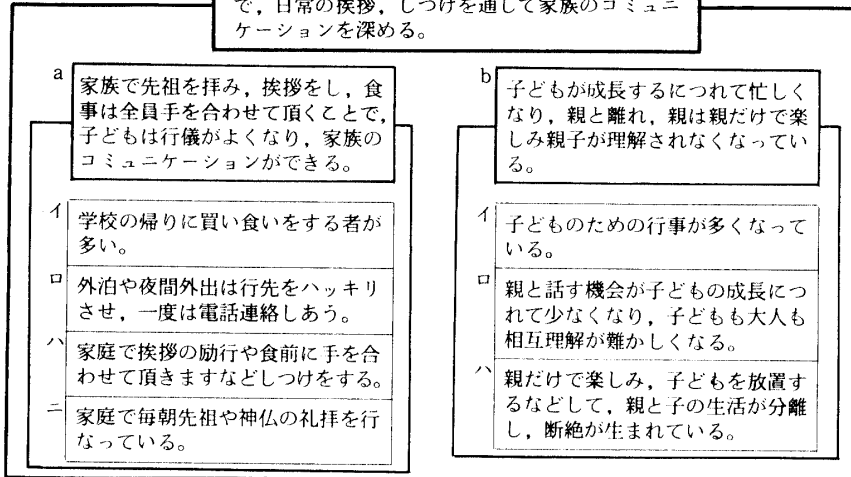


II 子どもの接触と相互理解を通しての指導への自信

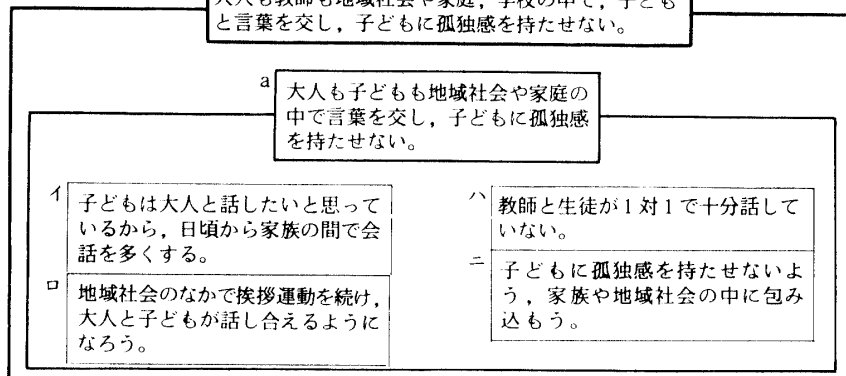
大人は子どもの活動や日常生活をよく見つけ、子どもとの接触を通して、お互いに子育ての基本を学び自信を持つ。

II-(1) 大人は忙しくとも子どもと言葉を交し、理解し合い、対立や孤独感をもたせないよう努力する。

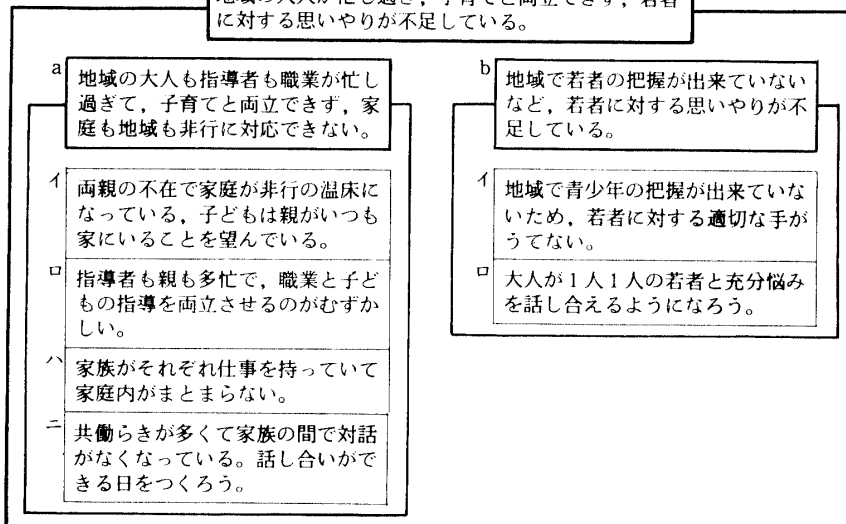
A 子どもの成長につれ親子の理解が難かしくなるので、日常の挨拶、しつけを通して家族のコミュニケーションを深める。



B 大人も教師も地域社会や家庭、学校の中で、子どもと言葉を交し、子どもに孤独感を持たせない。



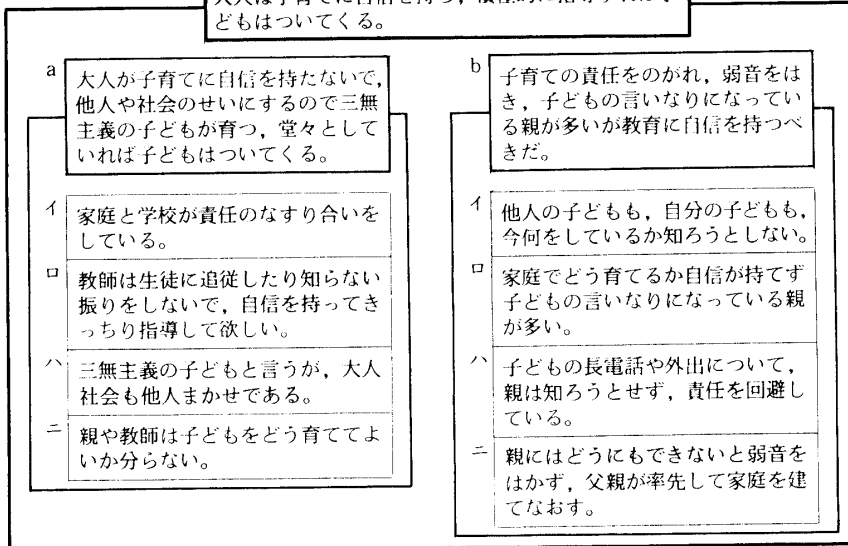
C 地域の大人が忙し過ぎ、子育てと両立できず、若者に対する思いやりが不足している。



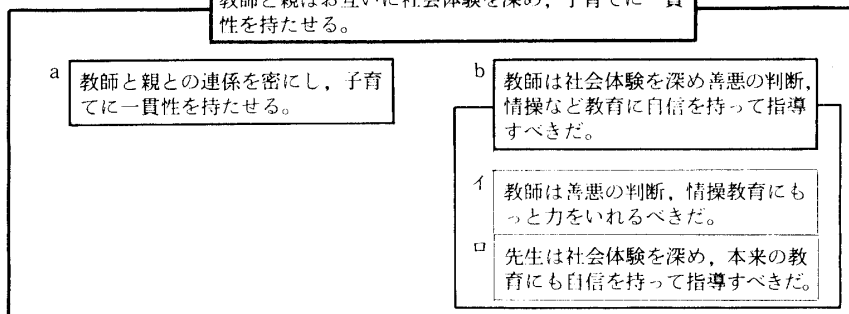
青少年育成の問題と指導者の意識

II-(2) 大人は子どもに生活を体験させ、自からも社会体験を深め、子育てに自信を持つこと。

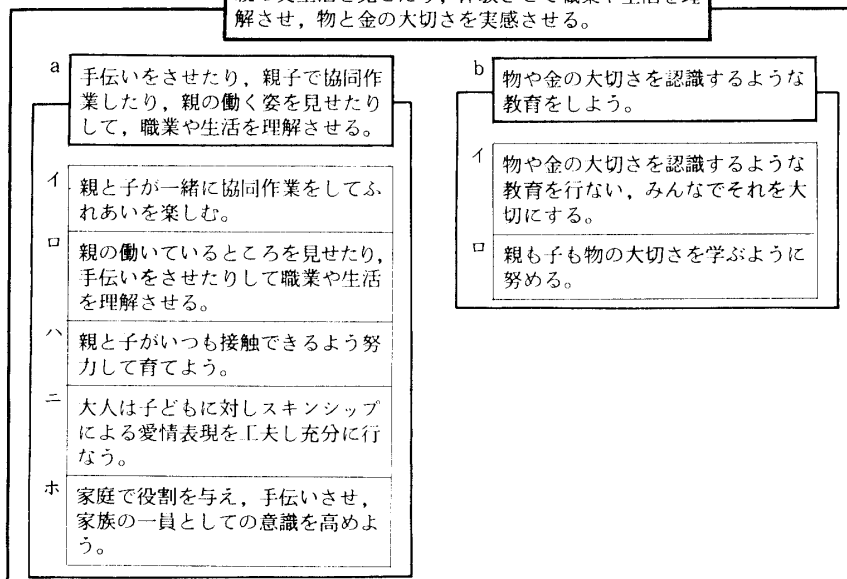
A 大人は子育てに自信を持ち、積極的に指導すれば子どもはついてくる。



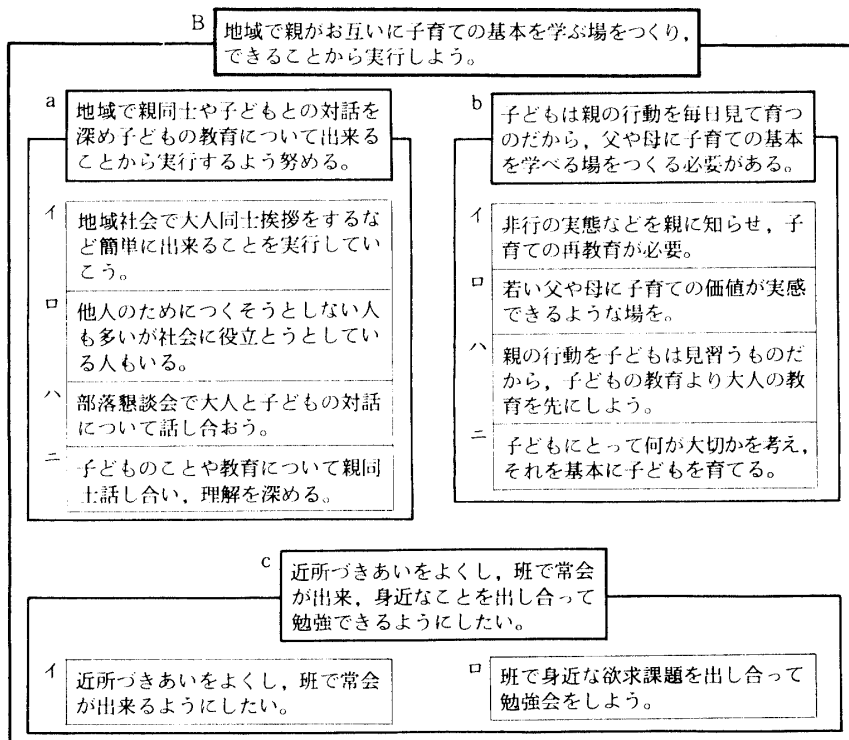
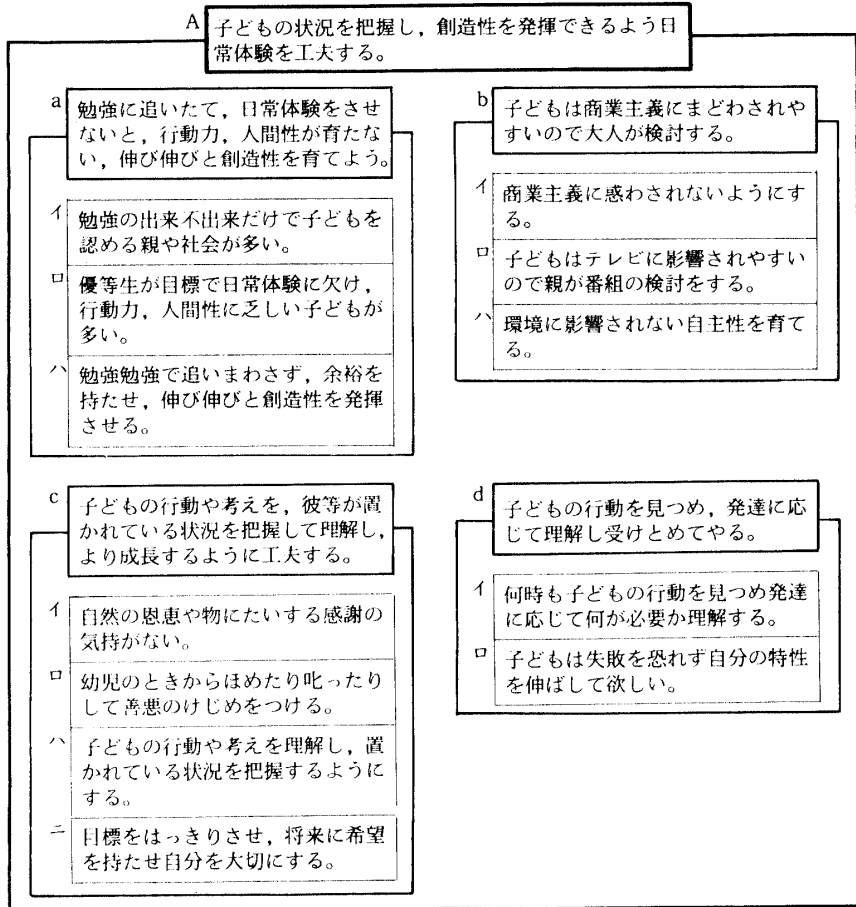
B 教師と親はお互いに社会体験を深め、子育てに一貫性を持たせる。



C 親の実生活を見せたり、体験させて職業や生活を理解させ、物と金の大切さを実感させる。



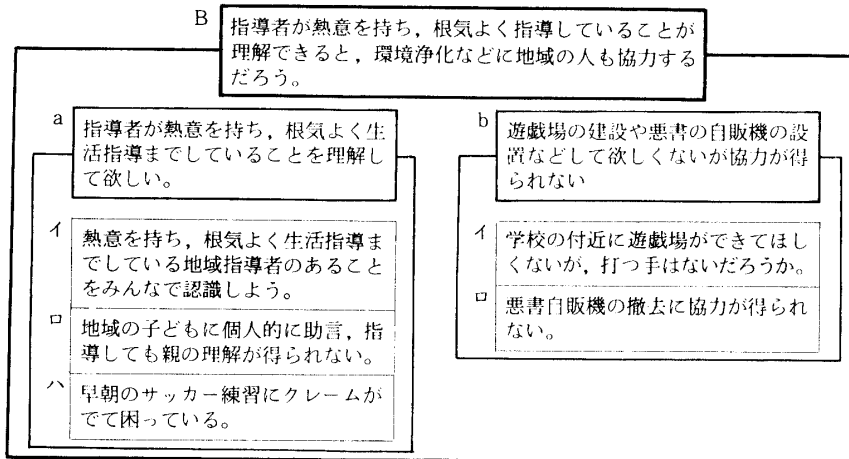
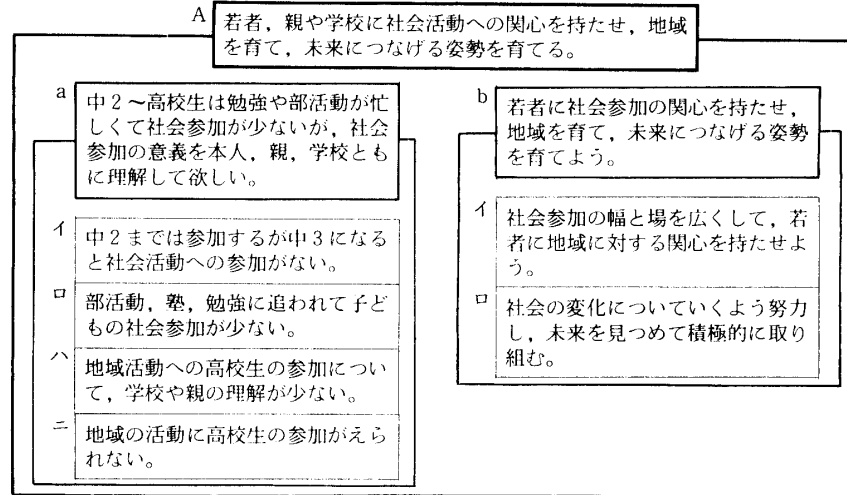
II-(3) 子どもの状況を把握し、創造性を発揮できるよう日常体験を工夫するなど、地域で親が子育ての基本を学ぶ場をつくる。



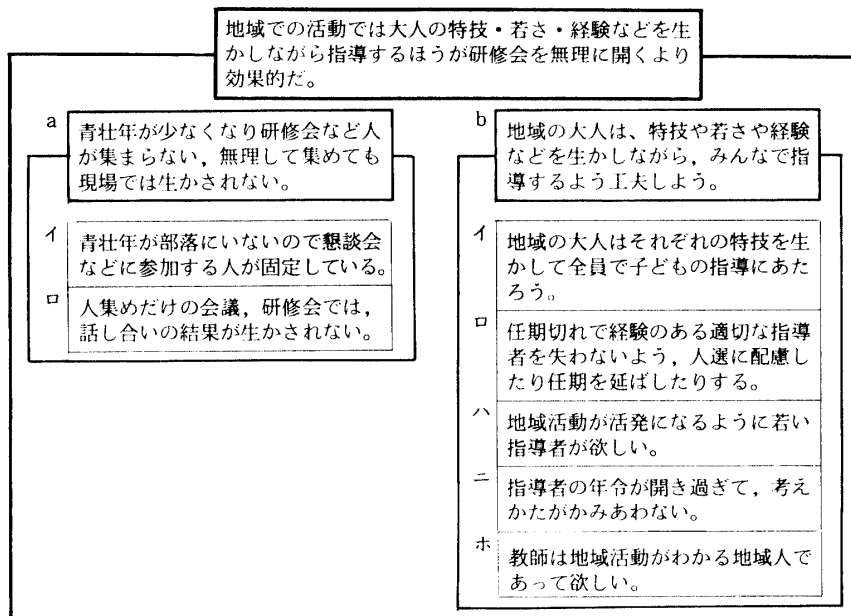
Ⅲ 指導者の自己研鑽と指導者間の相互調整

社会活動の指導者は関係団体、役員、親などとスケジュールの調整などを話し合い、特技・経験などを生かし、熱意を持って根気よく指導すること。

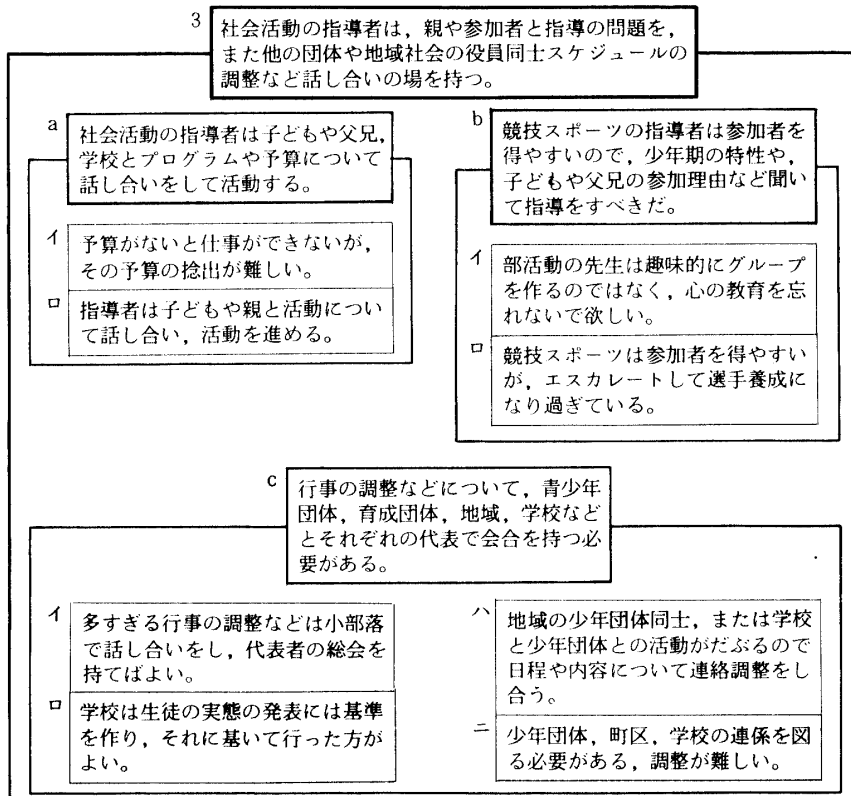
Ⅲ-1) 指導者は熱意を持って根気よく社会活動をすすめ、青少年が未来につながるような地域を育てる。



Ⅲ- (2) 地域の大人は経験や特技を生かしながら無理なく青少年の指導を行う。



Ⅲ- (3) 青少年指導関係者が話しを通して計画し、調整し、指導に当るべきである。



青少年育成の問題と指導者の意識

表1 回答者の性別・年齢別分布（数字は回答者数（）内は％）

	20歳－29歳	30歳－39歳	40歳－49歳	50歳－59歳	60歳－69歳	70歳以上	計
男性	11	60	92	78	145	29	415 (85.0)
女性	1	23	18	20	11	0	73 (15.0)
合計	12 (2.4)	83 (17.0)	110 (22.6)	98 (10.1)	156 (32.0)	29 (5.9)	488 (100.0)

表2 回答者の地区別・経験年数別分布（数字は回答者数（）内は％）

	1年未満	1－2年	3－4年	5－6年	7－8年	9－10年	10年以上	計
市部	10	13	18	30	12	5	31	119 (28.5)
郡部	66	47	54	47	22	14	49	299 (71.5)
合計	76 (18.2)	60 (14.4)	72 (17.2)	77 (18.4)	34 (8.1)	19 (4.5)	80 (19.1)	418 (100.0)

域と次元を抽出し、さらに地域の実態と問題点を明らかにしようとするものである。

質問紙作成

第1調査で得られた内容を具体的質問項目に直し、内容の重なり合いや質問項目としての適切性を考慮し、①子どもの問題、②大人の問題、③子どもと親・大人の関係、④地域社会での指導者の問題、の4つの領域に分けて質問項目を作成した。第1段階で作られた質問数は、①子どもの問題25問、②大人の問題18問、③子どもと大人の関係28問、④地域社会での指導者の問題23問、計94問であったが、研究者、行政担当者、実践指導者による討議の結果、調査可能性と簡便性を考慮して、①を20問に、②を13問に、③を24問に、④を19問に、計76問に減らすことにした。

回答は、①そう思う、②かなり思う、③どちらともいえない、④あまり思わない、⑤思わない、の5段階選択肢を用いた。

調査対象

佐賀県内の全領域にわたる11地域の青少年指導者513名であり、性別、年齢別、地区別、経験年数別は表1および表2のとおりである。なお、性、年齢、地区、経験年数など未記入の場合は、その指標に関する集計に限り削除した。

調査実施時期および実施方法

これは、第1研究の実施時期より1年後の昭和61年7月から62年2月までの間に、県内の11地域で行われた青少年育成指導者研修会に参加した指導者に対し、それぞれの研修会の席で質問紙を配布し回答を求めたものであ

る。

結果と考察

(1) 項目反応の平均と標準偏差

得点づけは、そう思うを5点、かなり思うを4点、どちらともいえないを3点、あまり思わないを2点、思わないを1点とした。

【I】 子どもの問題	平均	標準偏差
1) 今の子どもは自分本位でわがままである。……………	4.10	0.92
2) 今の子どもははっきりした意見をもち、他人の行動に左右されない。……………	3.13	1.07
3) 今の子どもは自分で責任をとろうとせず、他に責任を転嫁しやすい。……………	4.06	0.94
4) 今の子どもは案外、リーダーシップをうまくとることができる。……………	3.23	1.21
5) 今の若者にははっきりした目標をもった者が少ない。……………	3.92	1.03
6) 今の子どもには我慢する気持ちが欠けている。……………	4.57	0.71
7) 今の子どもは積極的で何事についてもやる気がある。……………	2.63	1.06
8) 今の若者にはブラブラして無駄な時間を過ごす者が多い。……………	3.61	1.08
9) 今の子どもには他人を思いやる気持ちががない。……………	3.65	1.04

	原	著		
10) 今の子どもには、他人の喜びや悲しみを理解する経験が乏しい。	4.02	1.01	30) 大人は叱るだけでほめることが少ない。	3.87 1.00
11) 今の子どもには成就感がもてるような団体活動や社会参加の機会が多い。	3.25	1.35	31) 子どもの指導に自信を持っている大人は少ない。	4.36 0.84
12) 今のこどもは、自主的集団体験が欠けている。	4.05	1.04	32) 小言を指導だと思っている大人が多い。	4.10 0.93
13) 今の子どもには、連帯感や協力の気持ちがある。	2.74	1.16	33) 大人の指導は口先だけで、行動が伴わないことが多い。	4.23 0.83
14) 今の子どもは遊び道具がないと遊べない。	4.29	1.01		
15) 今の子どもは子ども同士何でも気軽に話合っている。	3.94	1.06	【Ⅲ】 子どもと親、大人の関係	
16) 今の子どもは集団にとけ込めない者が多い。	3.51	1.04	34) 学校の行き帰りに買い食いしても何も言わない親が多い。	4.13 1.01
17) 今の子どもは集団になると悪いことをしたがる傾向がある。	3.50	1.15	35) 子どもが外出する場合、行き先をはっきり聞かない親がいる。	3.76 1.00
18) 今の子どもには、異なった年齢間の交流が不足している。	4.43	0.90	36) 家庭内で親子の挨拶が行われているところが多い。	2.99 1.16
19) 年上の子どもに年下の子どもを指導する機会を与えることが必要である。	4.86	0.45	37) 家庭では神仏や祖先の礼拝を行わせることが必要である。	4.66 0.73
20) 子どもが楽しめる地域行事が少ない。	3.77	1.18	38) 最近では、親子間のコミュニケーションがよく行われるようになった。	3.46 1.02
			39) 中学生や高校生になると親の注意を聞かないものが多い。	4.21 0.85
【Ⅱ】 大人の問題			40) 親は自分たちの生活を楽しむため、子どもの教育を犠牲にしている傾向がある。	2.96 1.17
21) 子どもの教育に無関心な父親が多い。	3.85	1.14	41) 今の子どもたちには、大人と話し合いたいという気持ちがある。	3.50 1.14
22) 親も子ども、何でもお金で解決しようとする傾向が強い。	4.27	0.85	42) 挨拶運動を続けることで、大人と子どもの理解し合う土台ができる。	4.59 0.71
23) 自分に出来なかったことを子どもに求める親が多い。	4.31	0.82	43) 大人が子どもの遊び場を取り上げている傾向がある。	3.69 1.10
24) 自分の子どもに夢中で、他人の子どもには無関心の親が多い。	4.33	0.76	44) 両親が働きに出て家庭にいないことが子どもに寂しさや欲求不満を起こしている。	4.46 0.79
25) 大人は、子どもに何かあると、すぐ「問題児」だと決めつける傾向がある。	4.00	0.98	45) 子どもたちが何でも相談できるボランティアや指導者が地域にいる。	2.32 1.26
26) 大人は、服装がルーズになると、「非行」の表れだと考える傾向がある。	4.24	0.77	46) 地域では、子どもの教育について話し合ったり相談したりする機会がある。	3.02 1.33
27) 大人は子どもを規則で束縛し過ぎてている。	3.58	1.09	47) 大人の社会が他人まかせで無責任なことが、子どもの社会にも反映している。	4.22 0.93
28) 大人は子どもや若者を信頼する気持ちに欠けている。	3.92	0.95	48) 子育てに自信がなく子どもの言	
29) 子どもの言うことを聞いてくれる大人が少ない。	3.60	1.02		

青少年育成の問題と指導者の意識

	いなりになっている親が多い。…	3.95	0.96		ないことが多い。……………	4.19	0.92
49)	子どもへの関心が過度か無関心かのどちらかで、両極端の親が多くなっている。……………	4.05	0.99	66)	地域の大人が全員で特技を生かして、子どもの指導に当たる必要がある。……………	4.56	0.72
50)	子どもの教育には父親の権威をもっと強くした方がよい。……………	4.38	0.91	67)	経験のある適切な指導者を生かすよう、配慮する必要がある。…	4.71	0.59
51)	手伝いなどさせ、親子が共同作業をすることによってお互いのコミュニケーションを深める必要がある。……………	4.89	0.38	68)	地域活動の指導者にもっと若い者が必要である。……………	4.65	0.66
52)	家庭で、親と子との接触を多くもてるような機会をつくる必要がある。……………	4.85	0.42	69)	地域活動の指導者間で、年代によって考え方に違いがありうまくいかない。……………	3.57	0.91
53)	家庭でも、日常生活の中で、想像性や人間性を育てるよう努める必要がある。……………	4.86	0.42	70)	教師も積極的に地域活動に参加してほしい。……………	4.73	0.66
54)	消費礼賛の傾向を反省させる指導は大人の責任である。……………	4.66	0.63	71)	地域活動のための予算の捻出が難しい。……………	4.24	0.93
55)	テレビ番組の選択は、大人が責任をもって行わせる必要がある。…	3.83	1.09	72)	地域の指導者が親や子どもと話し合う時間がとれない。……………	3.98	0.97
56)	子どもに自然に触れさせる機会を与え、自然の恩恵を実感させる必要がある。……………	4.85	0.41	73)	スポーツクラブの指導者は、技術を伸ばすことだけ考え心の教育を忘れている。……………	3.68	1.09
57)	学校と家庭は信頼し合ってもっと密接な連絡をとるべきである。…	4.81	0.53	74)	スポーツ少年団は子どもの協調性や責任感を育てるのに有効である。……………	4.56	0.73
	【IV】 地域社会での指導者の問題			75)	地域において、いろいろな団体の行事の調整が必要である。……	4.58	0.69
58)	現在では、勉強や塾に追われて、子どもの社会参加の機会がない。…	4.32	0.84	76)	学校はPTAだけでなく、地域社会との話し合いが必要である。…	4.76	0.51
59)	中・高校生の社会参加について、親や学校に理解がない。……………	3.71	1.09		(2) 因子分析による青少年育成問題の次元		
60)	社会参加の幅を広くし、若者に地域に対する関心をもたせる必要がある。……………	4.77	0.49		これまで行ってきた質問紙調査は、第1研究で得られたKJ法での結果を基に構成されたものであって、多様な内容を含んでいることは望ましいが、妥当性や信頼性を検討し、構造を明確に抽出するまでにはいたっていない。そこで、第1研究の枠組みを考慮しつつ検討する必要がある。そのため、この調査結果を第1研究で得られた領域と対応させながら、各領域毎に因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行い適切な解釈可能性に基づいて因子数を決定し、質問項目を選択し、各因子に命名してこれを次元とすることにした。		
61)	社会の変化についていけるよう、大人が積極的に取り組む必要がある。……………	4.69	0.59		その結果、「子どもの問題」領域については3因子、「大人の問題」領域については2因子、「子どもと親・大人の関係」領域については3因子、「地域社会での指導者の問題」領域については2因子が解釈可能で適切であった。これらの因子負荷行列と選択された項目および各因子毎の尺度としての信頼度を α 係数で示すことにする。		
62)	子ども会の指導者が生活面まで指導していることを地域社会の人々に知らせる必要がある。……	4.03	1.10				
63)	地域社会の浄化に住民が積極的でない。……………	4.00	0.99				
64)	地域社会の懇談会などに出席する人が固定している。……………	4.60	0.70				
65)	人集めだけの会議や研修会が多く、話し合いの結果が生かされ						

表3 「子どもの問題」領域についての因子負荷行列（回転後）

項目番号	因子A	因子B	因子C	共通性
1	0.61116	-0.10456	0.04893	0.38685
2	0.00014	0.43633	0.06514	0.19463
3	0.51231	-0.19897	-0.01724	0.30235
4	-0.12651	0.68441	-0.01934	0.48480
5	0.38754	-0.15770	0.35957	0.30435
6	0.44066	-0.06792	0.28222	0.27844
7	-0.24885	0.48569	-0.07311	0.30317
8	0.34286	0.01638	0.07670	0.12371
9	0.53517	-0.07162	0.36531	0.42499
10	0.28266	-0.15324	0.40165	0.26470
11	0.11494	0.38623	-0.16790	0.19058
12	0.20093	-0.22832	0.45099	0.29590
13	-0.15643	0.30934	-0.30751	0.21473
14	0.43181	-0.02843	0.18657	0.22208
15	-0.02497	0.31370	-0.19604	0.13746
16	0.23973	-0.16027	0.30259	0.17472
17	0.36151	0.14992	0.19487	0.19114
18	0.10536	-0.05403	0.45610	0.22204
19	0.12633	-0.02922	0.22121	0.06575
20	0.00531	0.04486	0.33102	0.11161
2乗和	2.02252	1.45374	1.41774	4.89405
寄与率	10.11260	7.26869	7.08852	24.46981
α 係数	0.7336	0.6063	0.5294	

表4 「大人の問題」領域に対する因子負荷行列（回転後）

項目番号	因子D	因子E	共通性
21	0.38402	0.22847	0.19967
22	0.58398	0.15833	0.36603
23	0.55494	0.10476	0.31893
24	0.66974	0.11410	0.46157
25	0.58745	0.23589	0.40064
26	0.46161	0.09401	0.22192
27	0.13116	0.42204	0.19532
28	0.12532	0.54441	0.30851
29	0.10779	0.67509	0.46737
30	0.19909	0.54742	0.33931
31	0.34351	0.37865	0.26137
32	0.45212	0.38075	0.34938
33	0.43554	0.27381	0.31073
2乗和	2.39947	1.75898	4.15845
寄与率	18.45746	13.53060	31.98806
α 係数	0.7818	0.6872	

表5 「子どもと親・大人の関係」領域についての因子負荷行列（回転後）

項目番号	因子F	因子G	因子H	共通性
34	0.07689	0.48698	-0.12083	0.25766
35	0.03237	0.53235	-0.05770	0.28777
36	0.06061	-0.17385	0.46932	0.25592
37	0.40762	0.05496	0.16040	0.19490
38	0.15647	-0.14236	0.48131	0.27703
39	0.17172	0.35571	-0.08981	0.16408
40	-0.00289	0.37570	0.10473	0.15213
41	-0.00507	-0.07159	0.30722	0.09953
42	0.26050	0.17475	0.19981	0.13832
43	0.02292	0.28582	-0.05005	0.08472
44	0.26979	0.39376	0.04627	0.22997
45	-0.00496	0.06756	0.65441	0.43285
46	0.01557	0.01460	0.51584	0.26655
47	0.23806	0.45529	-0.11833	0.27796
48	0.10360	0.63744	-0.06841	0.42174
49	0.18095	0.51989	-0.09714	0.31247
50	0.31490	0.31068	0.16632	0.22335
51	0.63391	0.08230	-0.01340	0.37174
52	0.67240	-0.01449	0.00405	0.45234
53	0.62364	0.04544	-0.04709	0.39321
54	0.46950	0.25127	-0.01265	0.28373
55	0.31078	0.16312	0.09913	0.13302
56	0.46230	0.07898	-0.01508	0.22018
57	0.44654	0.14386	0.05411	0.22302
2乗和	2.44570	2.25012	1.41924	6.11506
寄与率	10.19042	9.37552	5.91351	25.47943
α 係数	0.7253	0.7180	0.6300	

なお、数値が太字になっているのは、その項目がその因子測定の商品として選択されたことを意味する。

以上の結果から、それぞれの因子の測定尺度として下線を引いた項目による信頼度は、因子Cだけがやや低い値であったが、他はかなり高く、適切であることが α 係数の値から推測できる。

次に、各項目の妥当性を検討するために、各因子ごとの総得点と各項目との相関を求めたのが次の表7-1、7-2である。

表7-1、7-2からわかるように、各因子項目とも、総得点と各項目の相関は中程度に高いことがわかる。したがってこの面からみても、選択された項目をもとにそれぞれの因子を測定するのは妥当であると言えよう。

次に、項目間の相互相関による妥当性の検討を行ってみることにする。測定尺度の内部妥当性を検討する場合、各項目と総合点との相関は高い方が望ましいが、各項目間の相関はやや低い方が望ましい。それは、多様な内容の項目が集まって1つの共通な次元を形成していることを意味するからである。この意味で、各因子毎に項目間相互相関を示し検討することにする。

表8-1から表8-10に示すように、これらの項目間の相互相関の値を見ると、どれも低い程度でプラスの相関値を示している。このことから、それぞれの因子が多様な内容をもつことがわかり、前に示した総合点と各項目との高い相関と合わせて考えると、測定尺度として妥当なことを示すものといえよう。

表 6 「地域社会での指導者の問題」領域についての因子負荷行列(回転後)

項目番号	因子 I	因子 J	共通性
58	0.25042	0.39845	0.15939
59	0.10913	0.47335	0.23597
60	0.35188	0.22658	0.17516
61	0.57756	0.13871	0.35282
62	0.44757	0.06353	0.20435
63	0.11492	0.51164	0.27498
64	0.15867	0.43102	0.21095
65	0.09931	0.45828	0.21988
66	0.65502	0.07137	0.43415
67	0.68245	0.02226	0.46624
68	0.42105	0.19282	0.21446
69	0.14089	0.29082	0.10443
70	0.43887	0.11784	0.20649
71	0.33555	0.31763	0.21348
72	0.19522	0.48535	0.27367
73	-0.01600	0.46916	0.22036
74	0.38453	0.03865	0.14936
75	0.37346	0.21650	0.18560
76	0.47169	0.11972	0.23683
2乗和	2.72589	1.87551	4.60140
寄与率	14.34676	9.87108	24.21789
α 係数	0.7736	0.6388	

表 7-1 各因子毎の総得点と各項目の相関

【I】 子どもの問題					【II】 大人の問題				
因子A		因子B		因子C		因子D		因子E	
Q 1	0.4876	Q 2	0.2591	Q 10	0.3325	Q 21	0.3993	Q 27	0.3481
Q 3	0.3662	Q 4	0.4886	Q 12	0.3657	Q 22	0.5292	Q 28	0.4861
Q 5	0.4565	Q 7	0.4142	Q 16	0.2883	Q 23	0.4469	Q 29	0.5474
Q 6	0.4596	Q 11	0.2778	Q 18	0.2765	Q 24	0.5367	Q 30	0.4428
Q 8	0.3308	Q 13	0.3440	Q 20	0.2054	Q 25	0.5625	Q 31	0.3863
Q 9	0.5219	Q 15	0.2989			Q 26	0.4243		
Q 14	0.4017					Q 32	0.4716		
Q 17	0.3626					Q 33	0.4920		

青少年育成の問題と指導者の意識

表7-2 各因子毎の総得点と各項目の相関

【Ⅲ】 子どもと親・大人の問題						【Ⅳ】 地域社会での指導者の問題			
因子F		因子G		因子H		因子I		因子J	
Q37	0.3159	Q34	0.3947	Q36	0.3697	Q60	0.3274	Q59	0.3557
Q50	0.3174	Q35	0.4776	Q38	0.3831	Q61	0.5337	Q63	0.4050
Q51	0.4002	Q39	0.3527	Q41	0.2653	Q62	0.3541	Q64	0.3675
Q52	0.4356	Q40	0.2948	Q45	0.5104	Q66	0.5544	Q65	0.3518
Q53	0.4164	Q44	0.3302	Q46	0.4028	Q67	0.5373	Q72	0.3515
Q54	0.4103	Q47	0.4327			Q68	0.4081	Q73	0.3674
Q55	0.3327	Q48	0.5245			Q70	0.4018		
Q56	0.3729	Q49	0.4596			Q71	0.3432		
Q57	0.3998					Q74	0.3470		
						Q75	0.3560		
						Q76	0.4377		

表8-1 因子Aにおける項目間相関行列

	Q 1	Q 3	Q 5	Q 6	Q 8	Q 9	Q14	Q17
Q 1	1.0000							
Q 3	0.3723	1.0000						
Q 5	0.2752	0.1876	1.0000					
Q 6	0.3940	0.2527	0.3995	1.0000				
Q 8	0.2013	0.1027	0.2320	0.1250	1.0000			
Q 9	0.3414	0.2926	0.3831	0.3709	0.2311	1.0000		
Q14	0.2977	0.2895	0.2013	0.1875	0.2118	0.2933	1.0000	
Q17	0.1972	0.1065	0.2598	0.2122	0.2748	0.2639	0.2131	1.0000

表8-2 因子Bにおける項目間相関行列

	Q 2	Q 4	Q 7	Q11	Q13	Q15
Q 2	1.0000					
Q 4	0.3085	1.0000				
Q 7	0.1951	0.3779	1.0000			
Q11	0.1715	0.2039	0.1998	1.0000		
Q13	0.0107	0.2546	0.2679	0.1621	1.0000	
Q15	0.1032	0.2864	0.1759	0.1150	0.2315	1.0000

表8-3 因子Cにおける項目間相関行列

	Q10	Q12	Q16	Q18	Q20
Q10	1.0000				
Q12	0.3246	1.0000			
Q16	0.2256	0.2392	1.0000		
Q18	0.1815	0.2255	0.1054	1.0000	
Q20	0.0965	0.1157	0.1448	0.1779	1.0000

原 著

表 8-4 因子Dにおける項目間相関行列

	Q21	Q22	Q23	Q24	Q25	Q26	Q32	Q33
Q21	1.0000							
Q22	0.3326	1.0000						
Q23	0.2046	0.4085	1.0000					
Q24	0.2851	0.3680	0.4231	1.0000				
Q25	0.2561	0.3412	0.3608	0.3827	1.0000			
Q26	0.2048	0.2459	0.2149	0.2966	0.4105	1.0000		
Q32	0.2470	0.3030	0.2215	0.2760	0.4021	0.2877	1.0000	
Q33	0.2896	0.3455	0.2079	0.3616	0.3528	0.2567	0.3738	1.0000

表 8-5 因子Eにおける項目間相関行列

	Q27	Q28	Q29	Q30	Q31
Q27	1.0000				
Q28	0.3432	1.0000			
Q29	0.3125	0.4155	1.0000		
Q30	0.1866	0.3146	0.3862	1.0000	
Q31	0.1399	0.2385	0.3580	0.3581	1.0000

表 8-6 因子Fにおける項目間相関行列

	Q37	Q50	Q51	Q52	Q53	Q54	Q55	Q56	Q57
Q37	1.0000								
Q50	0.1604	1.0000							
Q51	0.2243	0.2608	1.0000						
Q52	0.2191	0.1183	0.3941	1.0000					
Q53	0.2587	0.1364	0.3237	0.5334	1.0000				
Q54	0.1859	0.2544	0.1833	0.1960	0.2054	1.0000			
Q55	0.1224	0.2066	0.0886	0.1724	0.1857	0.2831	1.0000		
Q56	0.2041	0.1038	0.3159	0.2818	0.3025	0.2616	0.1524	1.0000	
Q57	0.2016	0.1769	0.2186	0.3409	0.1522	0.2102	0.2651	0.2652	1.0000

表 8-7 因子Gにおける項目間相関行列

	Q34	Q35	Q39	Q40	Q44	Q47	Q48	Q49
Q34	1.0000							
Q35	0.4839	1.0000						
Q39	0.1477	0.2126	1.0000					
Q40	0.1843	0.2559	0.2162	1.0000				
Q44	0.1311	0.1552	0.2401	0.1660	1.0000			
Q47	0.1809	0.2424	0.2385	0.0940	0.2692	1.0000		
Q48	0.2740	0.2975	0.2157	0.1847	0.2346	0.4373	1.0000	
Q49	0.2109	0.2651	0.2155	0.1551	0.2106	0.3606	0.4804	1.0000

青少年育成の問題と指導者の意識

表 8-8 因子Hにおける項目間相関行列

	Q36	Q38	Q41	Q45	Q46
Q36	1.0000				
Q38	0.2974	1.0000			
Q41	0.2016	0.2074	1.0000		
Q45	0.3147	0.2686	0.2061	1.0000	
Q46	0.1859	0.2471	0.1288	0.4827	1.0000

表 8-9 因子Iにおける項目間相関行列

	Q60	Q61	Q62	Q66	Q67	Q68	Q70	Q71	Q74	Q75	Q76
Q60	1.0000										
Q61	0.3486	1.0000									
Q62	0.1253	0.3618	1.0000								
Q66	0.2466	0.4139	0.3079	1.0000							
Q67	0.2578	0.3370	0.2708	0.5309	1.0000						
Q68	0.2217	0.1819	0.1779	0.2803	0.3103	1.0000					
Q70	0.1448	0.2652	0.1531	0.3413	0.3192	0.2741	1.0000				
Q71	0.1226	0.2092	0.1342	0.2567	0.1852	0.2281	0.2002	1.0000			
Q74	0.0923	0.2677	0.1186	0.2653	0.2585	0.1601	0.2421	0.1929	1.0000		
Q75	0.1525	0.2111	0.1532	0.2007	0.2243	0.2623	0.1001	0.2841	0.1452	1.0000	
Q76	0.2402	0.3492	0.2415	0.2000	0.2955	0.2185	0.2616	0.1309	0.2706	0.2893	1.0000

表 8-10 因子Bにおける項目間相関行列

	Q59	Q63	Q64	Q65	Q72	Q73
Q59	1.0000					
Q63	0.2991	1.0000				
Q64	0.1197	0.3017	1.0000			
Q65	0.2577	0.1775	0.3294	1.0000		
Q72	0.2093	0.1841	0.2499	0.1647	1.0000	
Q73	0.1966	0.2812	0.1606	0.1960	0.2869	1.0000

表 9 青少年育成の問題領域と次元

【Ⅰ】 子どもの問題領域 (3次元)	因子A：自己本位・無責任・自主性欠如 因子B：社会的・積極的・協調性 因子C：社会活動体験不足	※ ※
【Ⅱ】 大人の問題領域 (2次元)	因子D：大人本位の思考と態度 因子E：大人の子ども非受容	※ ※
【Ⅲ】 子どもと親・大人の関係領域 (3次元)	因子F：家庭教育必要性の認識 因子G：子どもしつけへの無関心 因子H：子どもと大人の接触と理解	 ※
【Ⅳ】 地域社会での指導者の問題領域 (2次元)	因子I：地域ぐるみの子ども指導必要性の認識 因子J：地域問題への住民の不参加	 ※

※ 逆得点因子項目

(3) 青少年育成問題の領域と因子の命名

前述の質問への回答について各領域毎に因子分析を行い、解釈可能性の適切さに基づいて因子の数を選択し、各因子毎に負荷量の高かった項目を選んで信頼性や妥当性を検討したが、それらの項目内容を比較検討することによって、それぞれの因子に命名し、これを次元とした。それらを表にまとめると表9のとおりである。

その具体的内容は以下に示されている。各項目の前の番号は、質問紙での提示順序番号である。

(4) 領域別因子の質問項目**【Ⅰ】 子どもの問題（3次元）**

因子A：自己本位・無責任・自主性欠如（8項目）

- 1) 今の子どもは自分本位でわがままである。
- 3) 今の子どもは自分で責任をとろうとせず、他に責任を転嫁しやすい。
- 5) 今の若者にははっきりした目標をもった者が少ない。
- 6) 今の子どもには我慢する気持ちが欠けている。
- 8) 今の若者にはブラブラして無駄な時間を過ごす者が多い。
- 9) 今の子どもには他人を思いやる気持ちがない。
- 14) 今の子どもは遊び道具がないと遊べない。
- 17) 今の子どもは集団になると悪いことをしたがる傾向がある。

因子B：社会的・積極的・協調性（6項目）

- 2) 今の子どもははっきりした意見を持ち、他人の行動に左右されない。
- 4) 今の子どもは案外、リーダーシップをうまくとることができる。
- 7) 今の子どもは積極的で何事についてもやる気がある。
- 11) 今の子どもには成就感がもてるような団体活動や社会参加の機会が多い。
- 13) 今の子どもには、連帯感や協力の気持ちがある。
- 15) 今の子どもは子ども同士何でも気軽に話合っている。

因子C：社会活動体験不足（5項目）

- 10) 今の子どもには、他人の喜びや悲しみを理解する経験が乏しい。
- 12) 今のこどもは、自主的集団体験が欠けている。
- 16) 今の子どもには集団にとけ込めない者が多い。
- 18) 今の子どもには、異なった年齢間の交流が不足して

いる。

20) 子どもが楽しめる地域行事が少ない。

【Ⅱ】 大人の問題（2次元）

因子D：大人本位の思考と態度（8項目）

- 21) 子どもの教育に無関心な父親が多い。
- 22) 親も子ども、何でもお金で解決しようとする傾向が強い。
- 23) 自分に出来なかったことを子どもに求める親が多い。
- 24) 自分の子どもに夢中で、他人の子どもには無関心の親が多い。
- 25) 大人は、子どもに何かあると、すぐ「問題児」だと決めつける傾向がある。
- 26) 大人は、服装がルーズになると、「非行」の表れだと思える傾向がある。
- 32) 小言を指導だと思っている大人が多い。
- 33) 大人の指導は口先だけで、行動が伴わないことが多い。

因子E：大人と子ども非受容（5項目）

- 27) 大人は子どもを規則で束縛し過ぎている。
- 28) 大人は子どもや若者を信頼する気持ちに欠けている。
- 29) 子どもの言うことを聞いてくれる大人が少ない。
- 30) 大人は叱るだけでほめることが少ない。
- 31) 子どもの指導に自信を持っている大人は少ない。

【Ⅲ】 子どもと親・大人の関係（3次元）

因子F：家庭教育必要性の認識（9項目）

- 37) 家庭では神仏や祖先の礼拝を行わせることが必要である。
- 50) 子どもの教育には父親の権威をもっと強くした方がよい。
- 51) 手伝いなどさせ、親子が共同作業をすることによってお互いのコミュニケーションを深める必要がある。
- 52) 家庭で、親と子との接触を多くもてるような機会をつくる必要がある。
- 53) 家庭でも、日常生活の中で、創造性や人間性を育てよう努める必要がある。
- 54) 消費礼賛の傾向を反省させる指導は大人の責任である。
- 55) テレビ番組の選択は、大人が責任をもって行わせる必要がある。
- 56) 子どもに自然に触れさせる機会を与え、自然の恩恵

を実感させる必要がある。

- 57) 学校と家庭は信頼し合ってもっと密接な連絡をとるべきである。

因子G：子どもしつけへの無関心（8項目）

- 34) 学校の行き帰りに買い食いしても何も言わない親が多い。
 35) 子どもが外出する場合、行き先をはっきり聞かない親がいる。
 39) 中学生や高校生になると親の注意を聞かないものが多い。
 40) 親は自分たちの生活を楽しむため、子どもの教育を犠牲にしている傾向がある。
 44) 両親が働きに出て家庭にいないことが子どもに寂しさや欲求不満を起こさせている。
 47) 大人の社会が他人まかせで無責任なことが、子どもの社会にも反映している。
 48) 子育てに自信がなく子どもの言いなりになっている親が多い。
 49) 子どもへの関心が過度か無関心かのどちらかで、両極端の親が多くなっている。

因子H：子どもと大人の接触と理解（5項目）

- 36) 家庭内で親子の挨拶が行われているところが多い。
 38) 最近では、親子間のコミュニケーションがよく行われるようになった。
 41) 今の子どもたちには、大人と話し合いたいという気持ちがある。
 45) 子どもたちが何でも相談できるボランティアや指導者が地域にいる。
 46) 地域では、子どもの教育について話し合ったり相談したりする機会がある。

【IV】 地域社会での指導者の問題（2次元）

因子I：地域ぐるみの子ども指導必要性の認識（11項目）

- 60) 社会参加の幅を広くし、若者に地域に対する関心をもたせる必要がある。
 61) 社会の変化についていけるよう、大人が積極的に取り組む必要がある。
 62) 子ども会の指導者が生活面まで指導していることを地域社会の人々に知らせる必要がある。
 66) 地域の大人が全員で特技を生かして、子どもの指導に当たる必要がある。
 67) 経験のある適切な指導者を生かすよう、配慮する必要がある。

- 68) 地域活動の指導者にもっと若い者が必要である。

- 70) 教師も積極的に地域活動に参加してほしい。

- 71) 地域活動のための予算の捻出が難しい。

- 74) スポーツ少年団は子どもの協調性や責任感を育てるのに有効である。

- 75) 地域において、いろいろな団体の行事の調整が必要である。

- 76) 学校はPTAだけでなく、地域社会との話し合いが必要である。

因子J：地域問題への住民の不参加（6項目）

- 59) 中・高校生の社会参加について、親や学校の理解がない。

- 63) 地域社会の浄化に住民が積極的でない。

- 64) 地域社会の懇談会などに出席する人が固定している。

- 65) 人集めだけの会議や研修会が多く、話し合いの結果が活かされないことが多い。

- 72) 地域の指導者が親や子どもと話し合う時間がとれない。

- 73) スポーツクラブの指導者は、技術を伸ばすことだけ考え心の教育を忘れている。

なお、この他、問19、問42、問43、問58、問69、の5つの質問があったが、これらの質問は上述の10個の次元に入らない心理的意味が明確でないものであることが分かったので、これらを除去することにした。

(5) 性別、年齢別、地区別、経験年数別、各領域、次元毎の比較

反応の得点化は、望ましい方向の得点が高くなるように調整し、逆得点因子項目については、①「そう思う」を1点、②「かなり思う」を2点、③「どちらともいえない」を3点、④「あまり思わない」を4点、⑤「思わない」を5点、というように逆の順序で得点した。すなわち、因子A：自己本位・無責任・自主性欠如、因子C：社会活動体験不足、因子D：大人本位の思考と態度、因子E：大人の子どもの非受容、因子G：子どもしつけへの無関心、因子J：地域問題への住民の不参加、の6つの因子については逆転して得点した。さらに、各次元間を比較可能にするため、これを項目数で調整することによって、すべての因子次元で最低が20点、最高が100点になるように配点した。

その結果、得られた平均値と標準偏差を条件毎に比較検討したものを以下に示すことにする。

表10-1からわかるように、得点の傾向を3つに分けることができる。第1は、90点以上をとった因子Fと因子I、第2は、60点代をとった因子Bと因子H、第3

表10-1 因子次元毎の全回答者の平均と標準偏差

子どもの問題領域						大人の問題領域			
因子A		因子B		因子C		因子D		因子E	
\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D
40.69	11.26	63.52	13.05	41.18	12.02	37.03	11.17	42.56	12.90

子どもと親・大人の関係領域						地域社会での指導者の問題領域			
因子F		因子G		因子H		因子I		因子J	
\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D
92.62	7.15	40.94	10.97	62.01	15.09	91.26	7.50	39.87	11.42

表10-2 性別による次元毎の比較

	子どもの問題領域						大人の問題領域			
	因子A		因子B		因子C		因子D		因子E	
	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D
男性	40.62	11.28	62.61	13.37	41.01	12.30	36.95	11.05	42.28	12.75
女性	42.14	12.02	67.65	11.25	42.49	12.16	36.74	12.51	43.33	13.60
F 値	1.07		9.00 **		0.81		0.02		0.41	

** : $p < .01$, * : $.05 > p > .01$

	子どもと親・大人の関係領域						地域社会での指導者の問題領域			
	因子F		因子G		因子H		因子I		因子J	
	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D
男性	92.47	7.33	40.66	10.91	61.31	14.96	91.30	7.53	39.61	11.00
女性	93.40	6.62	41.80	12.83	65.91	14.91	90.37	8.88	41.59	14.36
F 値	0.98		0.62		5.62 *		0.83		1.74	

は、50点以下の因子A、因子C、因子D、因子E、因子G、因子Jである。

50点以下の平均しかとれなかった因子次元が6つあり、90点以上をとれた因子次元が2つしかないことを考えると、青少年育成指導が現状では十分でないと思われることがわかるであろう。かなり望ましい傾向を示した2つの次元は、「家庭教育必要性の認識」と「地域ぐるみの子ども指導の必要性の認識」であり、県民の青少年教育に対する意識の高さが伺われる。ところが、子どもの問題領域での「自己本位・無責任・自主性欠如」「社会活動体験不足」は共に40点そこそこで、現実の子どもに問題があると見られていることがわかる。また、大人の問題領域についても、「大人本位の思考と態度」と「子どもの非受容」の次元で同じく40点ぐらいの到達

度しかない。親の方にもかなり問題があるものと思われる。さらに、子どもと親・大人の関係領域でも「子どもしつけへの無関心」が40点不足で問題が多い。また、地域社会の指導者の問題領域でも、「地域問題への住民の不参加」が40点の到達度しかない。

全般に、指導者が見た一般の大人の青少年指導への関心や意識は高いが、現実には、子どもも大人も地域の指導者にも問題があることがわかる。つまり、青少年指導者には、青少年指導に関して意識と現実とのギャップがあると見られている。

性別による反応の違いはほとんど見られないが、因子Bと因子Hとで、女性の指導者の方が男性の指導者よりも高く、子どもをより積極的に協調性があると見、また、子どもと大人の接触の機会が多いと見ている。

表10-3 年齢別による次元毎の比較

	子どもの問題領域						大人の問題領域			
	因子A		因子B		因子C		因子D		因子E	
	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D
20代	46.25	18.46	59.63	13.99	44.00	12.65	42.00	8.56	41.60	10.53
30代	43.92	11.68	57.55	12.68	43.61	13.13	40.24	13.75	42.76	13.28
40代	42.27	10.60	63.46	12.40	42.68	11.02	37.95	10.04	42.24	11.63
50代	38.56	10.53	63.51	13.06	37.98	12.18	33.47	9.87	41.43	13.52
60代	39.26	11.37	65.48	13.56	41.32	12.42	36.04	10.78	43.24	13.41
70代	39.90	8.41	68.33	11.24	37.38	11.72	36.00	8.42	42.90	12.23
F 値	3.49 **		5.17 **		2.97 *		4.38 **		0.27	

	子どもと親・大人の関係領域						地域社会での指導者の問題領域			
	因子F		因子G		因子H		因子I		因子J	
	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D
20代	83.78	8.05	42.25	7.40	57.60	16.46	85.63	8.15	42.00	9.45
30代	89.24	8.39	43.98	11.07	57.54	13.71	88.01	8.88	42.07	13.22
40代	91.40	6.98	43.20	11.50	62.16	14.07	88.61	8.92	41.24	10.69
50代	93.61	6.31	38.16	10.08	62.82	15.37	91.62	7.32	38.92	11.50
60代	95.10	4.74	39.19	10.86	62.09	15.59	94.13	5.06	38.36	11.19
70代	95.16	4.15	38.45	10.32	67.86	14.12	94.55	4.24	38.16	12.07
F 値	15.09 **		4.62 **		2.61 *		13.07 **		1.76	

年齢別の結果を見ると、青少年指導者の中にも、いろいろな考え方や理解の仕方があり、それが年齢層によって大きく違うことがわかる。つまり、10個の因子次元のうち、年齢層間に有意な違いがあるのは8個もあり、その違いにかなり一定した傾向が見られるからである。

若年層の指導者が年配層の指導者より高い得点を得ているのは、因子A、因子C、因子D、因子G、因子Jであり、若年層の指導者は年配の指導者より、子どもを自主性があり、責任をもつ傾向があり、社会体験をより多くもっていると考えている。また、大人も子どもの教育を真剣に考えていて、しつけに対しても現在の親は関心が高く、地域問題への関心の高い親が多いと見ている。

これに対し、年配層の指導者が若年層の指導者より高い得点をとったのは、因子B、因子F、因子H、因子Iであり、今の子どもは積極的でより協力的であると思われ、親は家庭教育の必要性をより強く感じ、親子の間に接触やコミュニケーションがより高いと見、地域ぐるみで子どもを指導する必要があると感じていると見ている。

これらの点を合わせて考察すると、若年層の指導者

は、青少年指導の問題を積極的に期待をもって見ており、子どもや親の自立性を期待していると見てよからう。これに対し、年配層の指導者は、子どもたちは積極的であるが、社会の規範には必ずしも合致してなく、親や社会がもう少し統制的に働く必要があると感じているものと解釈される。

地区別による違いは6つの因子において見られ、郡部の指導者が市部の指導者より高いものは、因子C、因子D、因子G、因子Jであり、市部の指導者が高いのは、因子Hと因子Iである。

郡部の指導者は市部の場合より、子どもに社会活動体験が多いと見ていて、郡部では、集団活動や地域活動が多いことを物語っている。また、郡部の大人が子どもの考え方や教育に関心があることがわかる。このことは、子どものしつけへの関心がより高いことと関連していると考えてよからう。さらに、地域における問題については、郡部の方が市部より参加の度合いが高いことがわかり、やはり、市部においては地域とのつながりが薄いことがわかる。

市部の方が郡部より得点が高いのは、子どもと大人の

表10-4 地区別による次元毎の比較

	子どもの問題領域						大人の問題領域			
	因子A		因子B		因子C		因子D		因子E	
	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D
市部	39.46	11.30	63.04	13.41	39.41	13.00	34.88	10.25	41.22	12.30
郡部	41.46	11.14	62.67	13.14	42.12	11.89	37.98	11.38	43.28	13.34
F 値	2.75		0.071		4.29 *		7.11 **		2.24	

** : $p < .01$, * : $.05 > p > .01$

	子どもと親・大人の関係領域						地域社会での指導者の問題領域			
	因子F		因子G		因子H		因子I		因子J	
	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D
市部	93.59	6.01	38.59	10.36	63.56	15.26	92.67	6.29	38.09	11.15
郡部	92.37	7.24	42.06	11.28	60.17	14.64	90.38	8.25	40.63	11.81
F 値	2.71		8.74 **		4.69 *		7.64 **		4.24 *	

表10-5 経験年数別による次元毎の比較

	子どもの問題領域						大人の問題領域			
	因子A		因子B		因子C		因子D		因子E	
	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D
1年未満	42.03	10.66	62.31	13.09	42.05	11.29	39.72	11.35	45.80	13.15
1-2年	40.04	9.29	65.47	13.11	40.25	11.24	37.24	11.82	43.10	12.30
3-4年	42.60	12.24	64.00	12.45	45.90	12.09	36.97	9.36	44.77	13.71
5-6年	40.99	11.85	62.20	12.24	38.82	12.45	35.32	10.72	39.91	11.35
7-8年	40.13	13.49	63.33	16.67	41.58	15.38	37.13	13.05	42.46	12.60
9-10年	40.83	13.31	65.88	10.58	44.60	12.87	39.38	12.40	40.20	11.57
10年以上	39.97	10.14	62.29	12.63	39.21	10.85	36.01	11.32	40.00	11.91
F 値	0.61		0.73		3.32 **		1.38		2.72 *	

	子どもと親・大人の関係領域						地域社会での指導者の問題領域			
	因子F		因子G		因子H		因子I		因子J	
	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D	\bar{X}	S D
1年未満	90.23	7.37	45.31	12.63	58.12	14.34	87.41	9.01	41.39	11.48
1-2年	92.76	6.61	41.67	9.96	62.27	14.43	90.08	8.66	41.49	12.19
3-4年	91.11	7.78	42.05	9.48	61.06	15.00	90.83	7.36	41.50	12.90
5-6年	93.44	5.83	40.00	11.11	61.04	15.42	92.95	6.37	37.61	10.37
7-8年	92.17	11.65	38.78	11.78	63.18	17.29	92.42	6.06	38.21	11.72
9-10年	92.11	7.15	44.38	12.82	65.40	14.29	89.57	7.01	44.00	12.36
10年以上	95.10	4.94	37.92	10.13	62.11	13.71	93.51	6.19	38.07	10.71
F 値	3.99 *		4.08 **		1.07		6.17 **		2.13 *	

接触と理解であり、親子間のコミュニケーションが多く、ボランティアの指導者、子どもの教育についての話し合いの機会が多いことがわかる。これは新しい型の親子関係の表れかもしれない。また、地域ぐるみの子ども指導必要性の認識も高く、郡部より低かった社会活動経験などの内容と関連づけると、市部の方に意識と現実とのギャップが大きいことが推測される。

経験年数別で有意差を示したものは6次元あるが、そこには2種の傾向が見られる。1つは、経験年数が多くなるにしたがって高い得点をとるものであり、因子Fの「家庭教育の必要性の認識」と因子Iの「地域ぐるみの子ども指導の必要性の認識」である。これは、青少年指導の必要性の認識の高さが経験年数の高さに対応していて、経験年数が高くなればなるほど指導認識が高くなっていると見られていることである。しかし、他の4つの因子、すなわち、因子Cの「社会活動体験不足」、因子Eの「大人の子どもの非受容」、因子Gの「子どもしつけへの無関心」、因子Jの「地域問題への住民の不参加」は、逆に経験年数が多くなればなるほどうまくいっていないと見ていることを示している。つまり、経験年数が高くなればなるほど意識面は高いが実践面は低いと評定しているといつてよい。特にこの傾向は、経験年数5年から8年の人が一番高い。このぐらいの経験年数をもつと、青少年指導の在り方についての直接的体験からはっきりしたイメージが出来上がるのではないかと考えてよかろう。

要 約

本研究は青少年育成のための指導方針を明確にするための段階として、2つの目的をもって行われた。第1は、現実に青少年指導に当たっている指導者に青少年育成についての問題点を自由に記述してもらい、その中から具体的問題内容を抽出し、それを構造化することであった。

第2は、得られた問題点を基に質問紙を作成し、青少年指導者を対象に調査し、因子分析法を用いて青少年指導の問題の枠組みをつくり、これに基づいて実態を明らかにし、今後の青少年指導の手掛かりとすることであった。

研究は2つに分かれ、第1の研究では第1の目的に焦点を合わせ、青少年指導に関する問題の実態をできるだけ広範に具体的に把握するための調査で、佐賀県全域にわたる青少年指導者を対象に、最近の青少年の問題を自由記述式で求め、これを基にKJ法を用いて構造化した。

第2研究では、第1研究で得られた資料を基に質問紙

を作成し、これを実際の青少年指導者に配布して調査を行い、得られたデータを因子分析した。

第1研究での結果から、図1に示したとおり青少年育成の問題は大きく3つの領域に分けられた。すなわち、(1) 第1は、「大人の生き方や指導の姿勢の反省」であり、大人は生活態度を振り返り、統制による非行対策ではなく、自主的社会活動を通して、子どもに成就感を味合わせ、人間性を育てること。

(2) 第2は、「子どもとの接触と相互理解を通しての指導への自信」であり、大人は子どもの活動や日常生活をよく見つけ、子どもとの接触を通して、お互いに子育ての基本を学び自信をもつこと。

(3) 第3は、「指導者の自己研鑽と指導者間の相互調整」であり、社会活動の指導者は、関係団体、役員、親などとスケジュールの調整などを話し合い、特技、経験などを生かし、熱意をもって根気よく指導すること、であった。

第2の研究では第2の目的である質問紙作成と調査であり、得られた青少年育成の問題領域と因子は次のとおりであった。

青少年育成の問題領域と因子次元

(1) 子どもの問題領域(3次元)

因子A:自己本位・無責任・自主性欠如

因子B:社会的・積極的・協調性

因子C:社会活動体験不足

(2) 大人の問題領域(2次元)

因子D:大人本位の思考と態度

因子E:大人の子どもの非受容

(3) 子どもと親・大人の関係領域(3次元)

因子F:家庭教育必要性の認識

因子G:子どもしつけへの無関心

因子H:子どもと大人の接触と理解

(4) 地域社会での指導者の問題領域(2次元)

因子I:地域ぐるみの子ども指導必要性の認識

因子J:地域問題への住民の不参加

得られた結果をみると、全般に、指導者が見た大人の青少年指導への関心や意識は高いが、現実には、子どもにも大人にも地域の指導者にも問題があることがわかった。青少年指導者は、青少年指導に関する意識と現実との間にギャップがあると見ていることがわかった。

性別による反応の違いはほとんど見られないが、女性の指導者の方が男性の指導者より、子どもをより積極的に協調性があると見、また、子どもと大人の接触の機会が多いと見ていた。

年齢別の結果を見ると、かなり一定した傾向が見られた。若年層の指導者は年配の指導者より、子どもを自主

性があり、責任をもつ傾向があり、社会体験をより多くもっていると見ていた。また、大人も子どもの教育を真剣に考えていて、現在の親はしつけに対しても関心が高く、地域問題への関心が高いと見ていた。

これに対し、年配層の指導者は若年層の指導者より、今の子どもは積極的でより協力的だと見、親は家庭教育の必要性をより強く感じ、親子の間に接触やコミュニケーションがより高いと見、地域ぐるみで子どもを指導する必要性があると感じていた。

これらの点を合わせて考察すると、若年層の指導者は、青少年指導の問題を積極的に期待をもって見ており、これに対し、年配層の指導者は、子どもたちは積極的であるが、社会の規範には必ずしも合致してなく、親や社会がもう少し統制的に働く必要があると感じていと解釈された。

地域別に見ると、郡部の指導者は市部の指導者より、子どもに社会活動体験が多いと見、また、子どもの考え方や教育により関心があると見ていたことがわかった。さらに、地域における問題についても、郡部の方が市部より参加の度合いが高いことがわかり、市部においては地域とのつながりが薄いことがわかった。

これに対し、市部の方が郡部より得点が高いのは、子どもと大人の接触と理解であり、地域ぐるみの子どもの指導必要性の認識であった。これらの傾向を郡部より低かった社会活動経験などの内容と関連づけると、市部の方に意識と現実とのギャップが大きいことが推測される。

経験年数別で有意差を示したものは6次元あるが、そこには2種の傾向が見られた。1つは、経験年数が多くなるにしたがって高い得点になるものであり、家庭教育の必要性の認識と地域ぐるみの子ども指導の必要性の認

識である。これに対し、他の4つの因子、すなわち、社会活動体験不足、大人の子も非受容、子どもしつけへの無関心、地域問題への住民の不参加は、逆に経験年数が多くなればなるほどうまくいっていないと見ていたことがわかった。つまり、経験年数が高い指導者ほど意識面は高いが実践面は低いと評定しているといつてよい。特にこの傾向は、経験年数5年から8年の人が一番多い。このことから、5年から8年の直接的体験をもつとはっきりした問題のイメージが出来上がるのではないかと考えられる。

今後は、一般の大人の青少年育成についての問題をこの質問紙調査を用いて明確にし、到達度の低い次元に焦点を当てて働きかけを行い、意識の変革と指導の効果を高める必要があるだろう。

文 献

- 川喜多二郎 1967 発想法 中公新書
 川喜多二郎 1970 続・発想法 中公新書
 佐賀県青少年育成県民会議 1986 「青少年育成」の
 キーポイント
 佐賀県青少年育成県民会議 1987 「青少年育成」の
 キーポイント・Ⅱ

〔謝辞〕

本研究は佐賀県青少年育成県民会議および佐賀県青少年育成アドバイザー連絡協議会の協力によって行われたものである。調査に当たって、便宜を計ってもらい、積極的に協力して頂いたことを衷心より感謝するものである。

ABSTRACT

Perspectives on the Fostering Youths and the Awareness of Youth Guidance Leaders

Kazuma HARAOKA

As a means of investigating the guidance policy of youths, this study was conducted with two purposes. The first was to survey those actually involved in youth guidance about problems encountered in fostering the youth, through free-response items, which were then analyzed and structured.

The second purpose was the construction of a self-report questionnaire, administered to people involved in youth guidance, and factor analyzed for the extraction of the different categories of youth guidance problems. From this questionnaire, it was hoped that facts behind youth fostering could be exposed, in a cause to make recommendations for future guidance policies.

The study was divided into two parts, with the first part involved with the first purpose stated above. This part was aimed at grasping the realities of youth guidance to its widest and most concrete extent. A survey was conducted in all parts of Saga prefecture, the subjects being individuals involved with guiding youths toward adulthood. They were asked to freely describe the problems encountered in their efforts, and these responses were structured through the KJ method.

In the second part of the study, the data gathered in the first part was utilized in constructing a questionnaire, which was administered to subjects that were involved in youth guidance. The responses were analyzed through factor analysis.

As can be seen in Fig. 1, the problems implied from fostering youth, attained from the first part of the study, were determined to have a structure consisting of three factors :

1. The first factor was named “reconsideration of adult ways of life and guidance policies”. Adult attitudes toward life were reflected upon, and instead of imposing strict control over the youth with anti-delinquency policies, self-initiated social activities that would allow them to realize a sense of accomplishment and to foster their individuality were the underlying matter for this factor.
2. The second factor was “confidence in guidance through contract and mutual understanding with youth”. Here, adults observe children’s activities and everyday lives, and through interaction with them, discover the basics of raising up a child, attaining confidence in it via the process.
3. The third factor was “inter-leader accommodation and self-induced retraining”, concerning the interaction between youth social activity leaders with related organizations, administrators and parents, over matters such as scheduling of activities, exchange of ideas and skills.

The second part of the study focused upon the second purpose of constructing and administering a questionnaire devise. The resulting problem areas and corresponding dimensions in youth fostering and guidance were as follows:

1. the problem area of children (3 dimensions)
factor A: self-centeredness, irresponsibility and lack of individuality
factor B: constructively, socially-oriented, cooperative attitudes
factor C: lack of social activity
2. the problem area of adults (two dimensions)
factor D: adult-centered thinking and attitudes
factor E: neglect of children’s positions
3. the relationship between adults, parents and children (3 dimensions)
factor F: awareness of the necessity of education at home
factor G: lack of concern with child discipline
factor H: adult-child interaction and understanding
4. the problem area of guidance leaders in local units
factor I : awareness of the necessity of neighborhood participation in youth guidance
factor J : lack of participation of residents in local affairs

Viewing the results, it is apparent that, generally, youth guidance leaders see a high level of concern and awareness of adults with regard to youth fostering and guidance, but in reality, their appeared to be problems on the part of all parties involved, that is, the local leaders, the adults and the children. It was discovered that these leaders were conscious of the gap between their awareness and the reality concerning youth guidance.

There was little difference between male and female subjects, but the latter tended to view children as being more positive and cooperative, and also perceived that adults had more opportunities to interact with children.

Between age comparisons yielded a rather consistent pattern. Younger leaders felt that children were more self-reliant, had more responsibility and had more social experience than their elder counterparts. They also viewed adults as being more education-conscious, having more concern for child discipline and being more involved in local matters. In contrast, the older leaders were more likely to perceive that children were more positive and cooperative, that their parents were more sensitive to the necessity of in-home education, that parents and children had more interaction and communication, and that there was the need for neighborhood interest in youth fostering and guidance.

In consideration of these patterns, younger leaders seem to be more apt to have positive expectations of the issue of youth guidance, while older leaders view children as having positive attitudes which are not necessarily in conformance with social norms, requiring the guidance of parents and society.

Comparing localities, leaders in small communities had a tendency to see that their children had more social experience, while perceiving themselves as having more concern over education and children's thoughts, than their urban counterparts. Furthermore, there seemed to be more participation in local issues by those in small communities, compared to the urbanites, who had rather feeble commitments to their locality. However, the urban dwellers rated the necessity of adult-child interaction and understanding higher, having recognized the necessity of child guidance with the neighborhood as a unit. What is indicated by these findings is that there is a wide gap between reality and the consciousness of the urban leaders.

A comparison by years of experience in youth guidance showed significant differences in six dimensions, which could be summarized into two types of tendencies. The first was that as the years of experience increases, there appears to be more concern over home education and neighborhood involvement in child guidance. The second, which seems to be in opposition to the first, was that as experience increases, there appears more problems with issues regarding lack of experience in social activities, lack of acceptance of children by adults, lack of concern for child discipline and lack of participation in local issues by residents. In other words, the more experience a leader has, the more apt he is to be conscious of the problems at hand, yet the less likely he is to be active in trying to solve them. This tendency was most evident in those having five to eight years of experience. It can be implied that it takes five to eight years for the problems to be fully identified by the youth guidance leaders.

Further investigations into the matter should be done on a more general adult population, with a questionnaire survey of problems in youth fostering. The weaknesses in child guidance need to be identified and reinforced, and there needs to be instigated a change in the awareness of the problems and an improvement in guidance effectiveness.